3-6. COVID-19 パンデミック中の雇用状況と心理的ストレスの長期的変化との関連：NIPPON DATA2010

研究協力者　阿部　真紀子（福岡大学医学部衛生学・公衆衛生学教室）
研究協力者　有馬　久富　（福岡大学医学部衛生学・公衆衛生学教室）
研究分担者　奥田　奈賀子（京都府立大学大学院生命環境科学研究科）
研究協力者　谷口　祐一　（龍谷大学農学部食品栄養学科）
研究協力者　佐藤　敦　　（神戸薬科大学疾病予防学研究室）
研究分担者　西　信雄　　（聖路加国際大学大学院公衆衛生学研究科）
研究協力者　青野　直輝　（和歌山県立医科大学衛生学講座）
研究協力者　東山　綾　　（和歌山県立医科大学衛生学講座）
研究協力者　鈴木　春満　（和歌山県立医科大学衛生学講座）
研究協力者　岡見　雪子　（群馬大学食健康科学教育研究センター）
研究協力者　近藤　慶子　（滋賀医科大学 NCD 疫学研究センター予防医学部門）
研究協力者　北岡　かおり（国立健康・栄養研究所 産官学連携研究センター研究連携推進室）
研究分担者　門田　文　　（滋賀医科大学 NCD 疫学研究センター予防医学部門）
研究分担者　岡村　智教　（慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学教室）
研究分担者　大久保　孝義（帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座）
研究分担者　岡山　明　　（合同会社生活習慣病予防研究センター）
研究代表者　三浦　克之　（滋賀医科大学 NCD 疫学研究センター予防医学部門）

【目的】雇用状況が長期的に心理的ストレスに及ぼす影響についての関心が高まっている。本研究では、ケスラー6 項目心理的苦痛尺度（K6）を用い、COVID-19 パンデミック期間を含む長期追跡調査を通じて、社会経済的地位と心理的ストレスの関連性を検討することを目的とした。
【対象と方法】NIPPON DATA2010 の 2021 年追跡調査において、自己記入式質問票を用いて K6 スコアを評価した。11 年間にわたる雇用状況と K6 スコアの変化との関連性を検討した。多重回帰分析を用いて、雇用区分、世帯年収、婚姻状況、世帯人数を含む様々な社会経済的要因における K6 スコア変化の粗差および調整後の差を推定した。分析は、年齢、性別、都道府県の人口規模ごとに層別化して行った。
【結果】本研究の対象者は 1,532 名、平均年齢は 54.9 歳であった。2010 年～2021 年の 11 年間にわたり、性別および年齢層を問わず、参加者の K6 スコアの平均値は上昇した（男性：2.79 から 3.06、女性：3.15 から 3.56、65 歳未満：3.27 から 3.47、65 歳以上：2.37 から 3.08）。特に主婦などの非就業者は、フルタイムの就労者と比較して K6 スコアの有意な上昇を示した。この傾向は、特に女性、若年層、人口密集地域在住者において顕著であり、年齢との間に有意な交互作用が認められた。
【結論】過去 11 年間、非就業者、特に主婦（主夫）は、フルタイムで働く人々と比べて、より大きな心理的ストレスを抱えてきた。社会的つながりの強化や遠隔メンタルヘルスサービスなどの公的介入は、こうした格差を緩和し、精神的な健康状態を改善し、帰属意識を育むのに役立つ可能性がある。

***Journal of Occupational Health*, 2025, 67(1), uiaf045. doi: 10.1093/JOCCUH/uiaf045**